

<研究報告>

2010年米国ノースカロライナ州における 中高校生のための衣生活教育 —Raleigh市の事例に基づいて—

福田典子 信州大学教育学部生活科学教育講座

キーワード：FCS, 衣生活教育, 米国, ノースカロライナ州

1. はじめに

米国学校教育制度の特徴の1つは、教育行政が各州に委ねられており、州ごとに多様なカリキュラムが存在することである。初等教育にはわが国の教科名「家庭科」に類似した学習内容を扱う科目は見当たらないようであるが、中等教育においては選択または必修として、職業教育と関わって家庭生活に関する科目が存在する¹。この科目名が1993年に「Home Economics」から「Family and Consumer Sciences, FCS」へと名称変更されたことは注目される。また、全米の基準として(2008年) National Standards for Family and Consumer Sciences, Second Edition が示されているが、これは1998年に示されたスタンダードを2005年に改訂し、さらにその一部を修正されたものである。これは各州中等教育の基準を参考に総括的に策定されている。

これまで諸外国の教科教育のカリキュラムや指導の実態については、家庭科以外では米国の社会科^{2・3}や、ドイツの社会科^{4・5}、音楽科⁶の事例等が報告されている。また、家庭科に関しては、カリキュラム^{7・8}や教科指導に関して多数報告されている。例えば、アメリカの全領域⁹、住領域¹⁰、家庭経営領域¹¹、保育領域^{12・13・14・15}、金銭教育¹⁶、高齢者学習¹⁷、ホスピタリティ教育¹⁸などの事例が知られる。さらに、イギリスの食領域^{19・20・21}の事例、北欧フィンランドの全領域^{22・23・24}、北欧と英国の住領域(市民教育)²⁵の事例、中国の食領域²⁶の事例、韓国の食領域²⁷、カナダの全領域²⁸、家族領域²⁹、ドイツの全領域³⁰、台湾の家族領域³¹に関して、それぞれの特色等が報告されている。このように、諸外国の家庭科に関しては家族・保育領域の実態が比較的多く報告されていることがわかる。

ところで、諸外国の衣生活教育の指導例に関しては、他領域に比べ報告が多いとはいえない。これまでにオーストラリア³²、中国³³、カナダ³⁴、米国³⁵の事例が報告されているが未だ十分とは言えない。

そこで、本研究ではこれまで全く注目されなかった州ではあるが、米国東部の比較的温暖な海岸州であり、わが国と気候類似性の高いノースカロライナ(North Carolina :NC)州の中・高校生向きの衣生活教育に注目した。米国NC州のカリキュラムや教科書等の事例分析や考察を通して、米国の職業教育とわが国の普通教育の相違点や共通点を検討しつつ、今後のわが国の中・高校の家庭科教育における衣生活領域の指導のあり方について示唆を

得ることを目的とした。

2. 方法

2.1 調査時期および調査場所

調査時期は2010年から2011年であった。調査対象は米国南東部海岸沿い(UTC-5)に位置するNorth Carolina州(略号NC州)における中等教育の衣生活教育の実情であった。NC州は、従来からたばこや綿花の産地として有名な田園地域である。一方経済的側面としては、全米第2位の金融センターもある。歴史的な特徴としては、南北戦争において南部連合に属した州である。現在の人種構成比率は、約7割が白人、約2割が黒人、その他からなる。研究領域としては、農学や薬学が盛んであり全米ではこれらの領域の拠点となっている。日本との関係は、比較的気候も温暖であり、日系企業が多数進出していることが知られる。名古屋大学の米との共同研究拠点もある。古くから、日本の経済産業省とのつながりも深い。

NC州における学校制度はelementary grade(K-5)、middle school grade(6-8)、high school grade(9-12)と3区分されている。Kから12学年までの各学年において、その発達段階に合わせた教材が作成され各教科の指導が行われている。わが国の家庭科に最も類似する科目はmiddle schoolにもhigh schoolでも存在した。高校生向けには選択科目としてあり、生徒が各自選択して学習しているものと推察された。

2.2 主な調査内容と調査項目

調査対象資料として、全米における家庭科教育の指導基準として示されている「new National Standards for Family and Consumer Sciences Education, second edition, NASAFACS」(2008-2011)を取り上げた。さらに、NC州における家庭科教育の基準であって高等学校の中でも特にPublic School向けにNCの教育局により策定され、公表されている「Family and Consumer Sciences Education, FACSE」(2010年)に注目した。そして、その中から衣生活に関する選択科目として「Clothing Design :Apparel Development I」「Clothing Design :Apparel Development II」を選定した。その指導内容が明示されている「Clothing Design :Apparel Development I Course Number 7035 (2000年)および「Apparel Development II」 Course Number 7036 (2004年)を取り上げた。これら、2つの科目を中心に、その学習目標、構成等を中心に分析を行った。この指標は、NC州の高校家庭科教師によって組織された研究グループにより作成されている。さらに、一例としてNC州公立中学生向け科目「Exploring Life skills」を取り上げ、その内容を調査した。また、NC州公立中学校で当該科目について、実際に使用されていた教科書「TEEN LIFE！」(2008)の記述内容³⁶の分析を行った。

また、2010年ラーリー(Raleigh)市内の公立中学校を訪問し、授業参観や作品観察を行うとともに家庭科担当教員へ指導方法等に関する聞き取り調査を行った。

3. 結果と考察

3.1 全米のFCSスタンダードにおける衣生活の指導内容

表1に示すように米国FCSスタンダードの指導内容は8領域から構成され、衣生活の内容は「Textiles, Fashion and Apparel」のタイトル項目として位置づけられていた。このことから、わが国の現行の小・中学校家庭科のように衣生活と住生活を統合化するのではなく、従来わが国においてなされていたように、衣生活の独自の指導内容として学習効果を上げることが期待されているものと推察された。

表1 全米FCSにおける8つの指導領域

I モノの科学的な理解	
被服〔衣生活〕	① 生地、ファッションと既製服 (Textiles, Fashion and Apparel)
食物〔食生活〕	② 食物と栄養とウェルネス、 ③食品生産とサービス
住居〔住生活〕	④ 住居、インテリア、デザイン
II ヒトの科学的な理解	
保育	⑤ 幼児教育とサービス ⑥ 育児教育と人間の成長
家族	⑦ 家族と人間関係
III 生活全体の科学的な理解	
経営	⑧ 消費者教育と家庭資源管理

3.2 NC州FCSにおける高校生向きの衣生活領域の指導目標

NC州FCSスタンダードにおける高校生向きの指導目標には、①Family Life ②Work Life、③Careersの準備として生徒に教えることが明確に示されていた。すなわち、NC州のFCSでは、家族関係などの家庭生活の充実と生涯に亘る職業生活の充実のための学習内容を教科の独自の内容として位置づけているものと推察された。そして、その2つの特徴的な専門的な学習が土台となり、発展的に繋がっていく職業への理解が、体系的に位置づけられているものと理解できた。

NC州FCSスタンダードにおける高校生向き衣生活の指導に関して、表3に大目標を示した。表4に中目標を示した。中目標に示された7つの項目から2つを選び、さらに下位目標の例について表5に示した。一例として素材の評価および製作に関する目標を示した。

米国NC州では、FCSは職業教育の1つと位置づけられているために、目標が明確に職業教育として示されており、キャリア教育の1つとして科目が構成されている。したがって、その目標も衣生活に関連する職種への就職に連携した内容になっていることが特徴的であった。わが国の高校家庭科においても、専門学科として家政科関連の学科が設置されているが全国的に減少傾向であり、総合的な学科が増加傾向にある。本研究では、普通高校における一般普通科目としての家庭科指導への示唆を得ることをねらいとしているので、職業教育と普通教育の共通事項の確認という視点から、または職業教育と普通教育の対称

的な部分を見出す観点から調査を行った。

表3に示したように、到達目標として「知識」、「技能」、「実践」を統合化することが掲げられ、大目標として、知識と技能と実践の統合化が成文化されていることが明らかとなった。このことから、知識・技能の側面をそれぞれ伸ばすだけでなく、さらにそれを生活実践に関係づけ、密接に繋げて、最終的な子どもの実践力へと高める工夫がなされているものと推察された。さらに、指導方法も「知識」と「技能」と「実践」を明瞭に区別しつつ、各々を独立して定着させ、さらに有機的に結びつける工夫がなされているものと推察された。これは、わが国の小・中・高等学校の家庭科指導においても共通に重要な目標であり、最も難易度の高い到達目標であり、しかも家庭科の教科特性を象徴的に示すことを再確認することができた。

表4に示したように、中項目として、7項目の到達目標が示されているが、デザインと縫製に関しては実演できる(demonstrate)と表現されていた。その他は評価できる(analysis)や分析できる(recognize)と表現されていた。このことから、デザインや縫製に関する到達度の評価方法は、客観テストでの測定ではなく、糸や布を用いた小物の製作・補修・作りかえ(リフォーム)などに関して、教師により実際に観察される学習者の実技レベルを評価対象としているものと推察された。また、アパレル製造業や関連サービス業に就職するための知識や技能として、素材に関する理解と加工技能、消費者サービスと利潤追求の手続きに関する知識を一定水準以上有することが指導目標となっている。このことから、わが国の普通教育・家庭科においても、生徒の家庭生活における衣生活の管理運用能力を向上させるためには素材の科学的理解と芸術的センスを含めた加工技能が到達目標の柱になることを再確認した。わが国の家庭科の目標では加えて、繊維製品の管理力の項目があるが、NC州の目標ではあまり管理力(手入れ)は到達目標に示されていないことが明らかとなった。これは、米国NC州では、生徒の卒業後の就職先としてクリーニング関係よりも縫製または小売店への実数が多いために、あまり多く取り上げられないことが一因ではないかと推察される。また、当然のことながら、わが国の家庭科においては流通や商品管理はあまり扱われていない指導内容であるが、米国NC州の場合には、わが国に比べて、より重視しており、扱われていることが伺えた。流通や商品管理システムを理解すること消費者教育として大変重要な内容ではないかと考える。すなわち、米国NC州ではキャリア教育として、流通や商品管理を学び、わが国では消費者教育として学ぶ方向で検討する可能性もあることが示唆された。また、NC州では比較的手入れ指導の取り扱いが少ないように推察されたが、わが国においては家族や家庭生活理解や生活自立を目標としているので、被服管理の内容は充実すべきと考える。

3.3 NC州における高校家庭科の領域別履修実態

図1にNC州における高校家庭科に関連して、領域別履修の実態について2008-2009年の履修人数を基に算出した結果を示した。食生活領域の科目を選択履修する生徒が全体の49%で最も多く、次に保育30%、衣生活13%、住生活7%であった。食生活領域と保育領

域の選択履修割合が多い傾向にあることがわかった。これは、米国の育児において、社会や国よりも自己責任（保護者責任）の考え方が強く、政策面では中立的であることから、NC州の生徒にとって、必要感の高い領域であることが一因となるものと推察される。

3.4 NC州における公立中学校家庭科の指導内容

NC州における中学校家庭科は6・7・8学年で男女共学履修するのが一般的であった。表2にシラバスの例を示した。科目名は「Exploring Life Skills」(生活技術の探求)とあり、一生涯人間が家庭生活を送る上での人間の力を総称的に生活・生涯技能 (Life Skill) ととらえるものと推察された。Exploring は他教科にも用いられている。このことから、中学生の発達段階として、高校学習との一貫性を意識して科目名も選定しているものと考えられる。高校での各領域の深い学びを経験する前段階として捉えられ、生活全体を見渡す、概論または概説的な役割を持たせる科目であり、高校での各領域別の学びを見据えたオリエンテーション的な意義を持つのではないかと考える。

表2 中学校の家庭科のシラバス例 (Exploring Life Skills の場合)

<p><input type="checkbox"/> 授業科目名：「生活技術の探求Ⅰ」(Exploring Life Skills Ⅰ)</p> <p><input type="checkbox"/> 対象：7学年・8学年 履修時間：18時間(9時間×2年)</p> <p><input type="checkbox"/> ねらい：10代の若年中学生にとって、現在の生活および将来の生活において必要な生活技術の本質的な要素について探求する。この授業は以下の指導内容を含んでいる。</p> <p><input type="checkbox"/> 指導内容：</p> <p>① 家庭生活に関わる生活財等の資源の管理運用 ②縫製技能 ③意思決定に関する技術 ④家族関係</p> <p>⑤ 栄養と心身の快適感 ⑥保育 ⑦ 職業教育</p>
<p><input type="checkbox"/> 授業科目名：「生活技術の探求Ⅱ」(Exploring Life Skills Ⅱ)</p> <p><input type="checkbox"/> 対象：7学年・8学年 履修時間：18時間(9時間×2年)</p> <p><input type="checkbox"/> ねらい：生活設計力の応用力を高めるための基礎的力を向上させる。この授業で特に強調してつきたい力は以下のとおりである。学術的な知見を応用する技術課題を解決する力や創造的・批判的な力</p> <p><input type="checkbox"/> 指導内容：</p> <p>① 家庭生活に関わる生活財等の資源の管理運用 ②縫製技能 ③意思決定に関する技術 ④家族関係</p> <p>⑤ 栄養と心身の快適感 ⑥保育 ⑦職業教育</p>

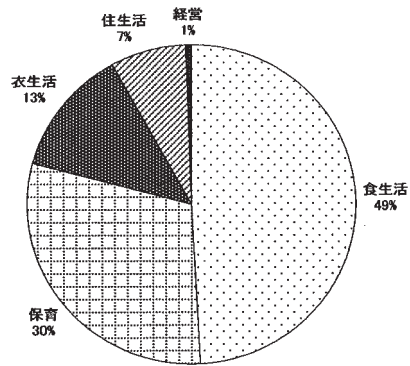


図1 高校における領域別の科目履修人数

表3 「布地と既製服 (Textiles and Apparel)」における大目標

布地や既製服に関わる職業に就くために必要な「知識」と「技能」と「実践 (実地)」を統合化することができる。

表4 「布地と既製服 (Textiles and Apparel)」における7つの中目標

- 1) 布地や既製服の製造業への就職のために必要なことを分析することができる。
- 2) 繊維や繊維製品の材料 (素材) を評価することができる。
- 3) 既製服や布地から成る繊維製品のデザインに必要な技能を実演できる。
- 4) 布地から成る繊維製品や既製服を製作・リフォーム・修繕するために必要な技能を実演できる。
- 5) 布地や既製服の販売に必要な小さな部局のレベルを評価できる。
- 6) 消費者サービスの構成要素のレベルについて評価できる。
- 7) 就業における利益性と職業活動における成功を得るための一般的な実施可能な手続きを実演できる。

表5 繊維や繊維製品の素材と構成に関する小目標

小目標 2) 繊維や繊維製品の材料(素材)を評価することができる。
<ol style="list-style-type: none"> 1) 最も一般的な繊維を判別し、比較し、分析することができる。 2) 繊維と布地の特性について自信を持って予知し、選択できる。 3) 世界的な市場経済における繊維製品に関する法規、規格、品質表示等について説明できる。 4) 製品デザイン、製造、手入れ、使用、管理に及ぼす布地の特性について評価できる。 5) 繊維製品の取り扱い方に関して、最も適切な方法を選ぶことができる。
小目標 4) 繊維製品や既製服を製作・リフォーム・修繕するために必要な技能(技術)を示すこと(実演)ができる。
<ol style="list-style-type: none"> 1) 既製服や繊維製品の製造、リフォーム、修繕に必要な多種多様な機器、用具、部品を取り扱う。 2) 繊維、糸、織物、編物、不織布の製造工程を調べる。 3) 洗濯、アイロン、仕上げ用など手入れ用の(工業)製品(市販の様々な消耗品)を適切に取り扱う。 4) 繊維製品や既製服に関して、デザインや製品を開発・発展させる科学技術や流行を探索する。 5) 繊維製品や既製服を製作する、またはリフォームするための基本的な技能(技術)を示すこと(実演)ができる。

表5に示したように、小項目のうち、素材評価力に関しては、縫製対象・管理保管対象・購買対象としての繊維製品の明確な区別はされず、いずれに関しても素材評価力が基本的な資質として必要なことが認識され、生徒の素材評価力の育成を目的とする到達目標に関しては、5項目が示されていた。一方、小項目のうち、リフォームを含む縫製能力に関しては、基本的縫製技能以外に製造工程、用具や機器、関連資材や製品、流行、などの内容が目標として掲げられていた。布や糸からなる材料を具体的により適切に、効果的に加工成型するために必要な知識と技能(技術)として、これらの内容が学習要素として認識されていることが明らかとなった。ここでは、縫製技能以外の製造工程や用具や機器、さらに、関連資材に関する内容も十分に扱われていることが特徴的であった。このことから、これらの機器理解の内容も基本的な資質として必要なことが分かった。生徒の縫製能力の到達目標に関して5項目が示されていることは大変興味深い。

また、被服製作の教育的意義が消費者教育的に明瞭に位置づけられ、被服製作学習の目標が着用目的にあった良質の既製服選択力、繊維製品の手入れ力を身に付けるためとされていた。すなわちNC州においては、生徒の製作体験が、既製服選択能力や管理能力に影響を及ぼすものとして、その教育的意義が共有されているものと推察された。

3.5 NC州ラーリー(Raleigh)市における中学校の衣生活指導例

1クラスの家庭科受講人数は16名~20名程度であった。生徒の男女比はほぼ同数であった。1名の女性の家庭科教員が指導を行っていた。生徒は4~5名で1班を構成し、4~5班で学習活動している様子であった。家庭科の講義・実習室は、わが国のような常設タイプの作業台や調理台ではなく、一人用の机と椅子を4~5つ近づけて大きなテーブルにして、グループ学習を行っていた。用具や小さな材料入れの棚やミンやアイロンなど

の機器は周囲壁面の棚に配置されていた。家庭科講義・実習室の隣部屋は、家庭科教員用の教材準備室と生地や用具置き場として設計されていた。

題材（製作課題）として、わが国で言えばパジャマの長ズボン風のロングパンツを男女とも製作していた。しかし、教科書の記載も合わせて類推すると、丈や裾デザインは個別に自由度の高いデザインの選択ができるように指導上の配慮がなされているものと推測された。最初にすべての生徒たちは、共通課題として1/8程度の雛形を実際に製作する同じ生地を用いて、製作していた。いずれの生地も中程度の厚さで、柄は春や秋用のやや大型のプリント柄が多かった。雛形用にも小さな、型紙を利用していた。この雛形作成を通して、製作の前に試作をすることにより、生徒が個々に用意した生地特性に慣れることや縫合部位や縫製手順を確認することなどをねらいとして指導されていた。ズボンは脇を縫製し、筒を製作した後にまた上を縫製するタイプか、また上を縫製した後に脇を縫製するタイプか縫製手順は不明であったが、より簡便な後者である可能性が高い。

その他の課題として、リサイクルによるバッグを製作していた。これは生徒全員なのか、選択した生徒のみの課題なのかは不明であった。リサイクルによるバッグとは、生地として、リサイクル材料を用いた縫製品ということである。一例として、飲料用のパックの包装材料として使われているやや固めの長方形の同一形状のフィルムをパッチワークのようにつなぎ、4面（側面）と同様な模様の1面（底部）を外表の直線ではぎ合わせたものを製作していた。わが国のエコ（買い物）バッグのような作品であった。

3.6 中学生向き教科書「Teen Life」における衣生活の記載

(1)学習・指導内容の構成と概要

衣生活の学習内容は、表6に示すとおりであった。①衣類を買うこと・手入れすることと②縫い方を学ぶという2つの柱で示されていた。わが国では、これまで学習内容が被服材料・被服整理・被服構成の3つの柱で示されることが多かったが、米国NC州も非常に類似した取り扱いがなされ、どちらかといえば、材料と整理が一体化し、購入と手入れが前面に出た内容構成であり、構成（造形）が独立した編成になっていることが明らかとなった。

表6 中学生向き教科書「Teen Life」の目次

1. あなたとあなたの周囲の人々	・あなた自身を学ぶ	・幼児について学ぶ
2. あなたはあなた自身のマネージャー	・意思決定するとは	・毎日の事柄を計画するとは
	・あなたの部屋を計画するとは	・あなたの将来のために生きるとは
3. あなたと食事	・あなたが食べている食事	・料理計画
		・台所
4. あなたと衣服	・衣類を買うこと、手入れすること	・縫い方を学ぶ
5. 仕事の世界	・仕事について学ぶ	・将来の自分の仕事のために準備する

表7 教科書における衣生活領域の到達目標

買うこと・ 手入れすること	1. あなたの衣類を設計する 2. 既製服を買う 3. 買う前に考えること 4. 繊維と生地 の性質 5. あなたの衣類を手入れする
縫う	1. 縫製の基礎 2. 縫うための準備 3. 縫製プロジェクト 4. あなたの衣類を繕う, 留め具などを取り替える, リフォームする

表7に教科書の衣生活に関する2つのテーマの小見出しを示した。この内容と配列より、CA州³⁵と同様に被服材料の学習内容が手入れ理解のために明確に位置づけられていることが明らかとなった。また、購入の際に必要な知識として、品質・サイズ情報や手入れ情報が挙げられ、この学習が購入場面に必須な内容として位置づけられている。また、購入の際の点検項目として、色柄等の着用者との嗜好調和性（適合性）や縫製レベル評価の記載もなく、組成の科学的把握が最も重視されていることから、科学的な選択力の育成が重視されているものと推察された。まさに、Consumer Scienceと科目名に用いられている消費者のためのScience科学的な見方や考え方を基本とした品質理解はわが国においても最も重視して学習指導していかねばならないものと考えられる。

次に着用者と被服とのサイズ適合性が重視されているものと推察される。このことは大変に興味深い。わが国における一般的な縫製品の品質レベルの評価規準としては、縫製レベルが第1位に優先され指導される項目である。この点について、今後再度検討すべきであろう。

(2)学習・指導内容の詳細

本論では特に手入れと製作の指導内容に注目し、表8にまとめた。手入れに関しては、手入れに必要な製品の基礎的な理解と使用上の留意点が指導されていることがわかった。また、ドライクリーニング向きの衣料に関する理解とともに、その適切な利用方法が取り扱われていた。また、アイロン仕上げ作業が保管と一括した扱いであることから、着用前というよりも、保管前の作業として意識されていること。または、手入れの過程の一作業として取り扱われているものと推察された。表9に縫製の内容を示した。

表8 「衣類を手入れする」の指導内容

1 洗濯に用いる洗剤などの製品	・セッケン・洗剤の投入量 (の表示理解) の決定
2 衣類を洗うこと乾かすこと	・洗濯機を利用する際の適正温度の決定 (選択) ・一般的なしみ抜きの方法
3 ドライクリーニング向きの衣料	
4 衣類の皺をアイロンで伸ばす, 折り目をきれいに付ける, 保管する。	・アイロンの適正温度の決定 (選択)

表9 「縫い方の学習」の指導内容

1 縫いの基礎	<ul style="list-style-type: none"> ・ミシンとは ・縫製するための部屋 ・用具 ・安全な作業
2 縫製前の準備	<ul style="list-style-type: none"> ・製作したいものの選定 ・型紙の選定 ・型紙表面に書かれている事項 ・型紙裏面に書かれている事項 ・生地選びと注意事項 ・型紙配置の検討, 待ち針での型紙固定, 裁断, 印つけ
3 あなたの作品づくり	<ul style="list-style-type: none"> ・基礎的な手縫いの方法 ・ボタンやホック (留め具) のつけかた ・ミシンの縫い目の大きさ
4 あなたの衣類の補修と留め具の付け替え	<ul style="list-style-type: none"> ・ファスナーの交換 ・ズボンやスカートの丈の修正 ・衣類のリフォーム ・生地や縫目に生じた裂け目の繕い ・サイズ直し (縫合線の変更)

4. わが国の中・高等学校家庭科における衣生活指導への提案

4.1 材料学習に関して

NC 州では、被服材料の特性理解をわが国のように失敗のない手入れと着心地評価と2つの目的を混在して説明し示すのではなく、適切な手入れ方法のより良い理解のための被服材料理解として取り扱われていた。発達段階の低いレベルにおいては、NCの事例のように、材料特性として目的なく説明記述するのではなく、目的別に完全分離し、より良い手入れ(管理)に必要な知識として指導展開する方が子どもの理解は容易に進む可能性があると考えられる。すなわち、水や熱に対する性質のうち、形態安定性や耐薬品性などの手入れに関する性質を先に学ばせ、その後に保温性や吸湿性などの保健衛生的な性質を指導展開する方が子どもの理解は容易に進む可能性があると考えられる。オーストラリアの事例においても、材料学習が手入れにつながって示される³²ことが指摘されている。

現在わが国において、着心地評価のための材料実験教材は幾つか提案され、教科書にも取り扱い例はあるが、手入れ方法の科学的理解のための材料学習に関しては、フェルトの収縮実験があるものの、実験教材が不足しているように思われる。したがって、自立した洗濯・手入れ力の育成に繋がる学習内容を簡潔に指導する実験教材の開発や工夫について今後、一層検討していく必要があると考える。

さらに、学習のステップとして、先ほど述べたように、第1段階として「合理的な手入れ」に必要な材料学習を定着させ、それを土台にして、関連性を密にしながら、自然な形で第2段階として「衛生的な着方」に必要な材料学習を進めるカリキュラム編成の検討も進めることを提案したい。

4.2 管理学習に関して

NC 州での取り扱い事例のように、手入れ学習の基礎的事項としては、洗剤の適正量、洗濯液の適正温度、衣類性質による乾式・湿式洗濯の使い分け、衣類性質によるアイロンの適正温度などが指導の中心となることが再確認できた。NC 州の事例では干し方や増白・漂白についてはあまり取り扱われていないことから、優先性が低い内容であることが確認できた。

わが国では被服整理用剤や利用機器に関しては、洗剤と洗濯機は取り扱われているが、増白剤、漂白剤、柔軟剤、のり剤、消臭剤等について、また、アイロンや乾燥機などの取り扱いはあまり多くはない。しかし、近年、わが国で利用されている洗剤以外の被服整理溶剤の消費量も多くなっていることから、基礎的事項は抑える必要があるように思われる。

干し方に関しては、NC 州では機械乾燥が主となっていることも、NC 州において取り扱いが少ない一因として推察できる。わが国でも、機械乾燥が増加傾向にあるものの、米国に比べて頻繁に衣類を日光（紫外線）に晒す習慣が定着しているので、特に発達段階の低い学習者対象の場合には干し方は洗い方と同様に重要な指導内容として取り扱う必要があるものとする。

4.3 製作学習に関して

NC 州での取り扱い事例のように、製作学習の基礎的事項としては、ボタンの付け替え、丈直し、安全な用具の利用方法などが指導の中心となることが再確認できた。NC 州の事例では型紙の利用について詳しく取り扱われているが、わが国ではあまり重視していない内容であることが確認できた。

生涯に涉り、充実した家庭生活を送るための技能ととらえたならば、スカートやズボンの丈など水平寸法の修正や身頃の脇線などの修正を行える技能は大変に利用頻度の高いものとする。わが国の現行の内容には扱われていないが、米国 NC 州において取り扱われているようにその教育的意義を再確認した。すなわち、生地から造形する実習だけでなく、既成着衣や譲渡された着衣を着用者の身体寸法や好みのデザインにより合わせて補正・修正するための技能を学び、体験する製作実習も検討すべきではないかと考える。

また、NC 州の教科書では、わが国に比べて、製作学習の記載がより自由に楽しい表現になっていることが特徴的であった。わが国においても、繊維製品（生地）の造形のための特性として捕らえ、紙材など他にはない特性を味わい楽しみ、生地の有効活用力やリフォームの発想力や製作意欲を育てるためには、補繕という消極的なアプローチだけではなく、積極的な創造的なものづくりの視点が必要であろう。中学校の美術教育と連携を深め、糸や布の材料特性を生かした自由な遊び心のある製作課題の展開が不可欠であり、芸術的な指導内容としての取り扱いの教材開発等も望まれる。

さらに、NC では買うという生活場面にその指導内容が繋がるような展開になっており、製作体験で得た知識が衣料選択の場面に多いに活用されることが示され、その教育的な意義が共有されているものと推察された。

5. 結論

米国, NC 州の FCS スタンダードの調査および NC 州の州都ラーリー市内の公立学校で衣生活指導事例の現地調査を行い, わが国の中学校・高等学校家庭科における衣生活指導との相違点や類似点を比較考察し, 以下のことを明らかにした。

- ① 米国 FCS スタンダードは8領域からなり, NC 州の高校向き衣生活の内容は「Textiles, Apparel and Fashion」の中で取り扱われていた。到達目標には布地に関わる職業のための「知識」と「技能」と「実践」を統合化させることができると示されていた。
- ② NC 州においては, 材料学習が安全で合理的な「手入れ学習」理解のための学習内容として位置づけられていることがわかった。
- ③ NC 州においては, 「被服製作学習」の教育的意義を消費者教育として位置づけ, 目的に適した良質の繊維製品の「手入れ実践力」および「既製服選択力」を向上させるための基礎的事項の習得に不可欠な学習要素として取り扱われていた。
- ④ 「技能」の評価方法として, demonstrate と表現されていることから, 客観テストで測定ではなく, 教師により観察される学習者の実技レベルを評価対象としているものと推察された。

謝辞

本研究では, (Teacher) Johnetta Lofton 氏, (Principal) Edye Morris-Bryant 氏, (Magnet Outreach Coordinator) Elwoold Peters 氏, (Teacher) Ryan Millhoff 氏, (Principal) Andrew Livengood 氏に大変なご支援をいただきました。心より御礼を申し上げます。

引用および参考文献

- 1 国立教育政策研究所, 2005, 「教科等の構成と開発に関する調査研究」研究成果報告書 家庭科のカリキュラム改善に関する研究—諸外国の動向—, pp. 1-17
- 2 溝口和宏, 1997, アメリカにおける公民教育と社会科学教育の統合—市民性育成のための初等カリキュラム—, 日本教科教育学会誌, 19(4), pp. 163-172
- 3 渡辺竜也, 2006, アメリカ社会科における社会問題学習の授業構成論—分析枠組・判断基準選定の意義—, 日本教科教育学会誌, 27(1), pp. 53-62
- 4 宇都宮明子, 2010, 1990年代の総合社会科におけるドイツ歴史学習の変革—社会理論研究としての歴史学習をてがかりとして—, 日本教科教育学会誌, 33(3), pp. 11-20
- 5 黒羽正見, 2003, 総合的な学習の単元構成についての—考察—ドイツの事実教授の教科書分析を中心にして—日本教科教育学会誌, 26(2), pp. 31-40
- 6 伊藤真, 2006, ドイツの音楽科教育における社会的学習に関する研究, 日本教科教育学会誌, 29(3), pp. 57-66
- 7 林末和子, 2000, 米国の家庭科ナショナルスタンダードにみられる「実践問題アプローチ」の影響, 日本教科教育学会誌, 23(3), pp. 27-36

- 8 林末和子, 2002, 現代アメリカ家庭科カリキュラムに関する研究 生活実践知形成, 風間書房
- 9 小川麻紀子, 長沢由喜子, 2003, 家庭科指導における批判的指導の導入 (第1報) アメリカ家庭科教科書の教師
用マニュアルにみる指導上の方略, 日本家庭科教育学会誌, 45(4), pp. 335-345
- 10 石井菜生, 2006, 近代日本女子高等教育に取り込まれたアメリカ住教育理念, 日本建築学会計画系論文集, 610, pp. 213-220
- 11 信清亜希子, 佐藤園, 2004, 普通教育における家庭科の教育内容構成—アメリカ『ティーンガイド』とわが国の家庭経営学習に関する教科書記述の構造分析を中心として—, 日本家庭科教育学会誌, 46(4), pp. 319-330
- 12 石井宏美, 酒井はるみ, 綿引伴子, 2005, アメリカ合衆国の家庭科教科書における「自分自身を見つめる」学習の検討 (第1報) 自己を知る視点, 日本家庭科教育学会誌, 48(1), pp. 22-31
- 13 綿引伴子, 石井宏美, 酒井はるみ, 2005, アメリカ合衆国の家庭科教科書における「自分自身を見つめる」学習の検討 (第2報) 自己と家族や他者とのかかわりのとらえ方, 日本家庭科教育学会誌, 48(1), pp. 32-41
- 14 藤後悦子, 2004, 青年期を対象としたペアレンティング教育の導入—アメリカのペアレンティングプログラムの例—, 日本家庭科教育学会誌, 47(3), pp. 248-254
- 15 荒井紀子, 1991, 米国家庭科カリキュラムにみる家族・保育学習 (第1報) —オハイオ州 83 版 “Practical Action” の概念と構造をめぐって—, 日本家庭科教育学会誌, 15(1), pp. 1-8
- 16 八幡 (谷口) 彩子, 高島亜希子, 緒方美智子, 2008, 中学校技術・家庭科「消費生活分野」への e-learning システム導入の試み—アメリカ社会人向け金銭教育のカリキュラムをもとに—日本家庭科教育学会誌, 51(1), pp. 19-27
- 17 渡瀬典子, 2000, 資料 高等学校教科書に現れる高齢者関連学習の目的と高齢者観 (第2報) アメリカ教科書研究と現行教科書の比較から, 日本家庭科教育学会誌, 43(2), pp. 117-122
- 18 佐藤英樹, 金田誠, 1998, アメリカの大学におけるフードサービスを中心とするホスピタリティ教育, 日本家政学会誌, 49(6), (通号 477) pp. 709-718
- 19 加納三千子, 藤井輝明, 西川龍也, 2008, イギリスの社会的企業ですすめられている食教育, 福山市立女子短期大学研究教育公開センター年報, (5) pp. 15-24
- 20 鈴木洋子, 2008, 児童を対象とした食育推進への提言—英国における Food in schools Programme および Healthier Cookery Clubs からの検討—, 日本家庭科教育学会誌, 51(1), pp. 11-18
- 21 片瀨結子, 中村修, 本田藍, 2009, 英国の肥満対策としての食教育, 長崎大学総合環境研究, 11(2), pp. 39-45

- 22 表真美, 2004, フィンランド総合学校における家庭科教育(第1報) フィンランド総合学校向け家庭科教科書および副読本の概要, 日本家庭科教育学会誌, 47(2), pp. 128-135
- 23 表真美, 2004, フィンランド総合学校における家庭科教育(第2報) フィンランドの教育制度と総合学校家庭科の目標・内容・履修, 日本家庭科教育学会誌, 47(2), pp. 136-146
- 24 表真美, 2006, フィンランド総合学校家庭科の授業実践, 日本家庭科教育学会誌, 49(3), pp. 189-196
- 25 薬袋奈美子, 水上聡子, 加藤優子, 2008, 小・における住教育の設問設定に関する研究—北欧及び英国のシテイズンシップ教育を通じた方法の検討—, 住宅総合研究財団研究論文集, 35, pp. 379-388
- 26 Terigele, 2007, 中国の食品安全・安心問題及び食教育—日本ほか先進国と比較して—, 関西教育学会年報, 31, pp. 121-125
- 27 上山恵子, 坂本裕子, てい姫真, 2009, 日本と韓国における食教育と年中行事の食べ方・調理状況・伝承に関する意識などとの関連, 家政学研究, 56(1), pp. 1-9
- 28 渡瀬典子, 2009, ブリテッシュコロンビア州の中等学校カリキュラム改革における家庭科, 日本家庭科教育学会誌, 52(3), pp. 195-202
- 29 上野顕子, 1994, カナダの家族の現状と学校における「家族」に関する学習(2)—カナダ・ブリティッシュコロンビア州の家族に関する学習から, 家庭科教育, No.68(13), pp. 47
- 30 上原康代, 中川眸, 1996, 近年のドイツにおける中等家政教育の動向—主要学校と実科学校を中心にして—日本教科教育学会誌, 22(1), pp. 1-9
- 31 正保正恵, 2009, 家庭科教育法としてのロールプレイングの研究—米国家庭科教育 Family Life Education をアレンジした台湾家庭教育の方法に学ぶ—, 福山市立女子短期大学紀要, 35, pp. 19-28
- 32 鋤柄佐千子, 1989, オーストラリア, ニューサウスウェールズ州の中等教育における衣生活教育, 日本家庭科教育学会誌, No.32(1), pp. 15-19
- 33 菊池るみ子, 劉智びん, 2005, 中日両国小学生の衣生活教育の現状と課題—天津市と高知市における事例調査を通じて—, 日本家政学会誌, 56(1), (通号477) pp. 31-39
- 34 福田典子, 1998, カナダ・ブリティッシュコロンビア州の中等教育における衣生活教育—被服材料および被服整理分野を中心として—琉球大学教育学部紀要, No.52, pp. 169-178
- 35 福田典子, 2001, 米国・カリフォルニア州の中等教育における衣生活教育—普通教育を中心として—信州大学教育学部紀要, No.104, pp. 1-11
- 36 Dunn-Strohecker & Tippett, 2008, TEEN LIFE !, The Goodheart-Willcox Company, Inc, Tinley Park, Illinois

(2012年1月20日 受付)

(2012年3月5日 受理)